

パーリ語の指示詞 *adum* の 照応用法について

京都光華女子大学真宗文化研究所特別研究員

稲葉 維摩

1. はじめに

本論文はパーリ語の指示詞 *adum* の照応用法を検討する¹。照応用法とは、言語的文脈において先行する語を指示詞で示すことである (Diessel 1999: 95–100 など)。*adum* の照応用法には、その多くがたとえ話との関連で使われるという興味深い傾向を見出すことができる。

本論文は *adum* の照応用法における使われ方を示し、*adum* が限定的な位置づけにあることを指摘する²。また、*adum* には談話直示用法 (discourse deictic use) の例がわずかながらあるので、これも本論文で取り上げる。

本論文が研究対象とした文献は、三蔵の内で *adum* が現れる *Dīghanikāya* (以下 D)、*Majjhimanikāya* (以下 M)、*Samyuttanikāya* (以下 S)、*Aṅguttaranikāya* (以下 A)、*Jātaka*、*Mahāniddeśa* (以下 Nidd I) である³。この他の文庫に *adum* は現れない。

2. 本論文の展望

パーリ語の基本的な指示詞として、*taṃ*、*idaṃ*、*etaṃ*、*adum*、*(e)naṃ* の5つがあげられる (稲葉 2022)。これまでにパーリ語の指示詞を取り上げた研究は管見の限り見られず、辞書や文法書による簡潔な記載があるだけだった⁴。パーリ語関連の研究史は長いものの、指示詞の使われ方や分布、他の指示詞と

の関係、意味といった基本的な問題は注意されてこなかったようである。

このような状況に対して、稲葉（2022）は *idam*、*etam*、*adum* の現場指示用法（直示用法）を検討した⁵。*idam* は指示対象が発話／対話の場にあると話し手に判断される場合に使われ、*etam* と *adum* は指示対象が発話／対話の場ないと判断される場合に使われる指示詞だと考えられる⁶。*etam* と *adum* は指示範囲が重なると考えられるが、*adum* は現場指示用法で用いられることが少ない。

本論文が取り上げる照応用法では、*adum* の多くがたとえ話との関連で使われるという特徴を指摘できる。逆に言えば、この他に用いられることはほとんどないため、他の指示詞と比べて限定的だと言える。

興味深いことに、*adum* が示すものとは別の名詞句を他の指示詞で示す場合、*tam* や *idam* は使われるが、*etam* が用いられることはない。本論文のあげる例では（1）、（2）、（6）、（8）で *tam* が、（10）で *idam* が使われている。これについて、稲葉（2022）で考察した *etam* と *adum* の指示範囲をふまえれば、別の指示詞を使う際に、指示範囲が重なる *etam* が避けられているのではないかと考えることができる。

3. *adum* の照応用法

言語的文脈における名詞句を指示詞で示すことが、指示詞の照応用法である。照応関係にある名詞句を先行詞（*antecedent*）という。先行詞が言語的文脈に既出の場合を前方照応という。一方、先行詞が文脈に出ておらず、背景知識と文脈に基づく推論から導き出される場合がある。これは間接照応（*indirect anaphora*）と呼ばれる⁷。*adum* は主に前方照応で使われるが、間接照応の場合もある。

現場指示用法で *adum* がほとんど用いられない一方、照応用法では *adum* が特徴的な使われ方をしている。注目に値するのは、ほとんどの例で *adum* がたとえ話に関わっていることである。具体的には、先行詞がたとえ話に出てきた

名詞句である場合と、*adum* がたとえ話の中で使われる場合がある。

それでは前方照応と間接照応を見ていこう。例文では *adum* とその先行詞、その他注目する語を太字で示す。和訳では指示詞を訳していない。これは理解が日本語の指示詞に引かれることに注意したためである。和訳で指示詞にハイフンが付いている場合は限定詞として解釈したことを表し、指示詞のあとに格助詞が続く場合は代名詞であることを表す。

3.1. 前方照応

まず、前方照応を見ていこう。*adum* は先立つたとえ話に関する問答で使われ、たとえ話に出てきた名詞句を示す。問題提起や判断の理由などを導く *taṃ kiṃ maññasi/maññatha* 「君／君たちは *taṃ* をどう考えるか」や *taṃ kissa hetu* 「*taṃ* はなぜか」などの節に続くことが多い。*taṃ* は談話直示用法である。前者の疑問文では談話の後続部分を指し、後者では先行部分を指す。例文ではこれらの疑問文を下線で示した。

(1) では、*adum* の他に *taṃ* も前方照応で使われている。はじめにたとえ話があり、その後、問答が続く。*adum* は *āpānīyakamsa-* 「飲み物の入ったうつわ」を限定している。*taṃ* の先行詞は *purisa-* 「男」である。問答のきっかけに、上述の疑問文がある。

(1) M II 260 *seyyathā pi, sunakkhatta, āpānīyakamsa* vaṇṇasampanno *gandhasampanno, so ca kho visena samsatṭho; atha puriso āgaccheyya jīvitukāmo amaritukāmo sukhakāmo dukkhapaṭikkūlo. taṃ kiṃ maññasi, sunakkhatta. api nu so puriso amum āpānīyakamsam piveyya, yaṃ jaññā: imāhaṃ pitvā maraṇam vā nigacchāmi maraṇamattam vā dukkhan ti.*

それはたとえば、スナッカッタよ、飲み物の入ったうつわがいい色をしており、いい香りもしている。けれども *taṃ* (飲み物の入ったうつわ) は毒と混ざっている。そこに、生きることを望んでおり、死なないことを望んでおり、楽を望み、苦しみに反対している男がやって来るとしよう。*taṃ*

をどう考えるか、スナッカッタよ。いったい、**tam**-男は「idam（飲み物の入ったうつわ）を飲んだ後⁸、死をこうむるか、死ぬほどの苦しみをこうむる」と知るならば、**adam**-飲み物の入ったうつわを飲むだろうか。

より正確に言えば、**adam** が示しているものは太字にした「飲み物の入ったうつわ」だけでなく、文脈で言われる他の情報も含んだものであることに注意する必要がある。すなわち「いい色をしており、いい香りもするが、毒と混ざっている、飲み物の入ったうつわ」が **adam** の先行詞である。

(2) のたとえ話には、**purisa**-「男」とその男が思いを寄せる **itthī**-「娘」が出てくる。**adam** はたとえ話のあとの問答で、この「男」と「娘」を指す。

(2) M II 223-224 seyyathā pi, bhikkhave, **puriso itthiyā** sāratto paṭibaddhacitto tibbacchando tibbāpekho. **so tam itthim** passeyya aññena purisena saddhim santiṭṭhantim sallapantim sañjagghantim samhasantim. **tam kim maññatha**, bhikkhave. api nu **tassa purisassa, amum itthim** disvā aññena purisena saddhim santiṭṭhantim sallapantim sañjagghantim samhasantim, uppajjeyyum soka-paridevadukkhadomanassupāyāsā ti. evam bhante. **tam** kissa hetu. amu hi, bhante, **puriso amussā itthiyā** sāratto paṭibaddhacitto tibbacchando tibbāpekkho; tasmā **tam itthim** disvā aññena purisena saddhim santiṭṭhantim sallapantim sañjagghantim samhasantim, uppajjanti sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā ti. 「例えば、比丘たちよ、男が娘に熱を上げており、心が縛られており、意欲が激しく、欲求が激しい。**tam**（男）は、**tam**-娘が他の男と一緒にいたり、しゃべっていたり、大笑いしていたり、ほほえんでいるのを見るときよう⁹。比丘たちよ、君たちは **tam** をどう考えるか。いったい、**adam**-娘が他の男と一緒にいたり、しゃべっていたり、大笑いしていたり、ほほえんでいるのを見て、**tam**-男に苦悩、嘆き、苦しみ、不快さ、労苦が生じるだろうか。「その通りです、尊き君よ。 **tam** はなぜでしょうか。というのも、尊き君よ、**adam**-男は **adam**-娘に熱を上げており、心が縛られてお

り、意欲が激しく、欲求が激しいからです。それ故、**taṃ**-娘が他の男と一緒にいたり、しゃべっていたり、大笑いしていたり、ほほえんでいるのを見て、苦悩、嘆き、苦しみ、不快さ、労苦が生じます」。

(2) の細かな点を見ていくと、はじめの問いかけ *taṃ kiṃ maññatha* 「君たちは **taṃ** をどう考えるか」の後では、たとえ話に登場した娘の方に *adum* を使い、男には **taṃ** を使っている。一方、その応答では、娘と男の両方に *adum* を使っている。すぐ後には、娘を指すのに指示詞が **taṃ** に変わっている。それ故、*adum* と他の指示詞との使い分けが問題になる。

(1) では、**taṃ** に対して *adum* がたとえ話の中で先に導入された名詞句を指していた。一方 (2) は、2つの名詞句のどちらにも *adum* と **taṃ** を使っていた。次の (3) では、*kassaka-gahapati*-「農業を営む家長」と3種類の *khetta*-「耕地」のすべてに *adum* を使っている。さらに (6) は、後に言われた方に *adum* を使っている。このように、*adum* は談話に導入された先行詞の順番とは関係なく使われる。

(3) S IV 315 *taṃ kiṃ maññasi gāmaṇi. idha kassakassa gahapatino tīṇi khet-tāni ekaṃ khattam aggam ekaṃ khattam majjhimam ekaṃ khattaṃ hīnaṃ jaṅgalam ūsaram pāpabhūmikaṃ*,¹⁰ *taṃ kiṃ maññasi gāmaṇi. asu kassako gahapati bījāni patitthāpetukāmo kattha pathamam patitthāpeyya, yaṃ vā aduṃ khattam aggam yaṃ vā aduṃ khattaṃ majjhimam yaṃ vā aduṃ khattaṃ⁺ hīnaṃ*¹¹ *jaṅgalam ūsaram pāpabhūmin ti. asu bhante kassako gahapati bījāni patitthāpetukāmo yaṃ aduṃ khattam aggam tattha patitthāpeyya, tattha patitthāpetvā yaṃ aduṃ khattam⁺ majjhimam*¹² *tattha patitthāpeyya, tattha patitthāpetvā yaṃ aduṃ khattaṃ⁺ hīnaṃ*¹³ *jaṅgalam ūsaram pāpabhūmi tattha patitthāpeyya pi no pi patitthāpeyya.*

「**taṃ** をどう考えるか、集落の長よ。ここに、農業を営む家長が3つの耕地を持っている。1つは上位の耕地、1つは中くらいの耕地、1つは下位

の、乾いた、塩を含む、ひどい土地の耕地である。tam をどう考えるか、集落の長よ。**adum**-農業を営む家長は、種を植えようと考えたと、最初はどこに植えるだろうか、**adum**-上位の耕地か、**adum**-中くらいの耕地か、**adum**-下位の、乾いた、塩を含む、ひどい土地の耕地か。「尊き君よ、**adum**-農業を営む家長は種を植えようと考えたと、**adum**-上位の耕地に植えるでしょう。tatha (tam に属する場所の副詞) に植えてから、**adum**-中くらいの耕地に植えるでしょう。tatha に植えてから、**adum**-下位の、乾いた、塩を含む、ひどい土地の耕地に植えるか、あるいは植えないでしょう」。

これまでに下線で示してきた疑問文は絶対的なものではなく、他の表現で問題提起する場合もある。(4) には tam kiṃ maññasi/maññatha や tam kissa hetu はないけれども、たとえ話に関する疑問文と回答の根拠を導く文がある(下線部)。なお、たとえ話の中にも **adum** が出てくるが、これはたとえ話の人物のことばであるため、現場指示と捉えておく。

(4) A III 394 seyyathā pi āvuso **cātummahāpathe** thullaphusitako devo vasantanto rajam antaradhāpeyya cikkhallaṃ pātukareyya, yo nu kho āvuso evaṃ vadeyya na dāni **amusmiṃ cātummahāpathe** puna-d-eva rajo pātubhavissatī ti, sammā nu kho so āvuso vadamāno vadeyyā ti. no h' idaṃ āvuso, thānaṃ h' etaṃ āvuso vijjati. yaṃ **amusmiṃ cātummahāpathe** manussā vā atikkameyyuṃ gopasū vā atikkameyyuṃ vātātapo vā snehagataṃ pariyādiyeyya, atha puna-d-eva rajo pātubhaveyyā ti.

「例えば、長寿なる者よ、空は大きな雨粒の雨が降っており、四つ辻ではほこりをなくし、泥を生み出すとしよう。長寿なる者よ、このように『今や **adum**-四つ辻に、二度とほこりは現れないだろう』と語る場合、長寿なる者よ、いったい tam (ほこりは現れないと語る人) は正しく語っていることになるだろうか」。「いいえ、長寿なる者よ。というのも etaṃ-状況があ

るからだ¹⁴、長寿なる者よ。**adum**-四つ辻で人間たちが通りすぎるか、牛や家畜が通り過ぎるか、風と熱が湿った状態を取り去るかすれば、その時ふたたび、ほこりが現るだろう」。

次に、たとえ話の語りで使われる *adum* を取り上げる。これまでに見た例では、*adum* がたとえ話のあとに使われていたが、たとえ話の中で使われることがある。次の例では、たとえ話の中で、*adum* と *kiṭṭha*-「穀物」が照応の関係になっている。

(5) S IV 195–196 *seyyathā pi bhikkhave kiṭṭhaṃ sampannaṃ kiṭṭhārakkho ca pamatto, goṇo ca kiṭṭhādo adum kiṭṭhaṃ otaritvā yāvadatthaṃ madam āpa-jjeyya.*

たとえば、比丘たちよ、穀物は実り、穀物番の人は放逸であり、穀物を食う牛は **adum**-穀物に降りてきて、目的の限り夢中になるとしよう。

(6) のたとえ話は2人の人物をあげるが、*amaggakusala-purisa*-「道に詳しくない男」を *tam* で指し、*maggakusala-purisa*-「道に詳しい男」を *adum* で指す。*adum* で指された方の人物は、直後に *tam* で言及されている。なお、(6) には enclitic の指示詞 *enam* も出てくる。*enam* は、散文では多くの例で *tam* とともに現れる¹⁵。(6) の *tam enam* は *magga*-「道」を限定しているのだが、「道」は先行文脈に出ていない。これは3.2. 節で見るような間接照応と言える。

(6) S III 108 *seyyathā passa tissa dve purisā eko puriso amaggakusalo eko puriso maggakusalo. tam enam so amaggakusalo puriso amum maggakusalam purisaṃ maggam puccheyya, so evaṃ vadeyya.*

たとえば、ティッサよ、二人の男がいるとしよう。片方の男は道に詳しくなく、片方の男は道に詳しい。**tam**-道に詳しくない男が **adum**-道に詳し

い男に *taṃ enam*-道を尋ねるとしよう。*taṃ*（道に詳しい男）が次のように言うとしよう。

以上に見たように、*adum* の前方照応はたとえ話と関連して使われるという特徴が指摘できる。一方で、*adum* と他の指示詞の関係が問題になる。とくに *taṃ* との交替が多いが、こうした問題は、個々の指示詞の振る舞いとともに関後の課題となる¹⁶。しかし少なくとも、*adum* が先行詞の導入された順番に関わっていないことから、他の指示詞との関係においてもそうした順番は関わっていないと考えることができるだろう。

3.2. 間接照応

これまでにあげた例では、*adum* の先行詞は先行文脈に既出の名詞句であった。しかし、先行詞が先立つ文脈に出ておらず、背景知識と文脈に基づく推論によって導かれる場合がある。(7) を見てみよう。たとえ話は、病気が治った人物を炭の入った穴に放り込むと、病気と同じような痛みのあまり、あちこちと身をよじるというものである。これまでと同様、*adum* はたとえ話についての間答で使われる。*adum* が指しているのは *aggi*-「火」なのだが、この語は先行文脈に存在しない。

(7) M I 507 *seyyathā pi māgandīya kuṭṭhī puriso arugatto pakkagatto kimhi khajjamāno nakhehi vaṇamukhāni vippatacchamāno aṅgārakāsuyā kāyaṃ paritāpeyya, tassa mittāmaccā nāṭisālohitā bhisakkaṃ sallakattaṃ upatṭhāpeyyuṃ, tassa so bhisakko sallakatto bhesajjaṃ kareyya, so taṃ bhesajjaṃ āgamma kuṭṭhehi parimucceyya, arogo assa sukhī serī sayamvasī yena-kāmaṅgamo; taṃ enam dve balavanto purisā nānābāhāsu gahetvā aṅgārakāsuṃ upakaḍḍheyyuṃ. taṃ kim maññasi māgandīya: api nu so puriso iti c’ iti c’ eva kāyaṃ sannāmeyyā ti. evaṃ bho gotama, taṃ kissa hetu: asu hi bho gotama aggi dukkhasamphasso c’ eva mahābhīṭapo ca mahāpariḷāho cā ti.*

「たとえば、マーガンディヤよ、ハンセン病の男が、肢体は傷だらけで、肢体は化膿しており、虫にかまれており、爪で傷口をひっかいており、炭の入った穴で身を焼くようである。*tam* (病人) の友人や仲間、親族や血縁たちが外科の医者をもたらしてくるでしょう。*tam*-外科の医者が *tam* (病人) に治療を施すでしょう。*tam* (病人) は *tam*-治療に到って、ハンセン病から解放されるとしよう。病気がなく、楽で、自由に動き、自分で過ごし、思うところに行くようになるでしょう。*tam enam* (病気が治った男) を2人の力持ちの男がそれぞれの腕に抱えて、炭の入った穴に引き入れるでしょう。*tam* をどう考えるか、マーガンディヤよ。いったい、*tam*-男はあちこちと身をよじるだろうか。「その通りです、君、ゴータマよ。*tam* はなぜか。というのも、君、ゴータマよ、*adum*-火は接触が苦しみであり、ひどい高熱で、ひどい苦痛があるからです」。

どうして *adum* は先行文脈に出ていない「火」を指しているのだろうか。これは背景知識と文脈から間接的に理解される。人物が放り込まれた穴には、炭が入っている。人物はその穴の中で、あちこちに身をよじると予想される。人物が病気だった時の描写にも「炭の入った穴で身を焼くようである」というたとえがある。また、炭というものは火に関係するものである。これらのことから、炭についている「火」が導き出される。

次の例には2つのたとえ話があり、それぞれに *adum* が使われている。実際には話が続けているのだが、説明の点から (8b) に分けた。(8a) のたとえ話は、小さなうつわに塩を入れて塩水を作るというものである。*adum* が指す *lonaphala*-「塩のかたまり」と *udaka*-「水」は、どちらもたとえ話に出ている。(8b) のたとえ話では、塩をガンジス川に入れる。*adum* は *mahant-udakakkhandha*-「大量の水」と *lonaphala*-「塩のかたまり」を示している。「塩のかたまり」はたとえ話の中に出てくるが、「大量の水」は出ていない。また、(8a) では *tam* が *paritta-udaka*-「少しの水」を指しているが、これも先行文脈に出てこない。

(8) a. A I 250 seyyathā pi bhikkhave puriso **loṇaphalaṃ** paritte udakamallake pakkhipeyya. tam kiṃ maññatha bhikkhave. api nu **tam parittaṃ** udakamallake **udakaṃ amunā loṇaphalena** loṇaṃ assa apeyyan ti. evaṃ bhante. tam kissa hetu. **aduṃ** hi bhante **parittaṃ** udakamallake **udakaṃ.** tam **amunā loṇaphalena** loṇaṃ assa apeyyan ti.

「比丘たちよ、たとえば人が塩のかたまりを小さな水を入れるうつわに入れるとしよう。君たちは tam をどう考えるか、比丘たちよ。いったい、水を入れるうつわに入っている **tam**-少しの水は、**aduṃ**-塩のかたまりでしょっぱく、飲めなくなるだろうか。「その通りです、尊き君よ。tam はなぜか。というのも、尊き君よ、水を入れるうつわには **aduṃ**-少しの水が入っているからです。tam (少しの水) は **aduṃ**-塩のかたまりでしょっぱく、飲めなくなるでしょう」。

b. seyyathā pi bhikkhave puriso **loṇaphalaṃ** gaṅgāya nadiyā pakkhipeyya. tam kiṃ maññatha bhikkhave. api nu sā gaṅgā nadī **amunā loṇaphalena** ^{+loṇā}¹⁷ assa apeyyā ti. no h' etaṃ bhante. tam kissa hetu. **asu** hi bhante gaṅgāya nadiyā **mahā udakakkhandho.** so **amunā loṇaphalena** loṇo ^{+na}¹⁸ assa apeyyo ti.

「比丘たちよ、たとえば、人が塩のかたまりをガンジス川に入れるとしよう。君たちは tam をどう考えるか、比丘たちよ。いったい、**tam**-ガンジス川は **aduṃ**-塩のかたまりでしょっぱく、飲めなくなるだろうか。「etaṃ はありません¹⁹、尊き君よ。tam はなぜか。というのも、尊き君よ、ガンジス川には **aduṃ**-大量の水があるからです。tam (ガンジス川) は **aduṃ**-塩のかたまりでしょっぱくならず、飲めなくなるでしょう」。

ガンジス川に豊富な水量が流れていることは、当時の社会の一般的な知識と言えるだろう。小さなうつわの水量と比較されていることも含めて、**aduṃ** は先行文脈に出ていないガンジス川の「大量の水」を指すことができる。(8a)の「**tam**-少しの水」についても、先行文脈の「小さな水を入れるうつわ」に塩

を入れるということから「小さな水を入れるうつわ」に入っている「少しの水」が導かれる。

4. 談話直示用法

以上に見てきたように、*adum* はたとえ話に関連した照応用法に使われる。そのかたわら、談話直示用法の例がある。本節ではこれについて述べる。談話直示用法は、談話のある部分を指す使い方である²⁰。

(9) は、阿羅漢が何ものにも執着しないことを解説する内容である。一方の腕に香りをつけ、もう一方の腕を切り落としても平静でいるというたとえに対し、*adum* は2回使われている。はじめの *adum* は「片方の腕に香りをつける」こと、あとの *adum* は「片方の腕を斧でたたき切る」ことを指している。

(9) *Nidd I 114 katham arahā itthāniṭṭhe tādi. arahā lābhe pi tādi, alābhe pi tādi, ... ekañ ce bāhaṃ gandhena limpeyyum, ekañ ce bāhaṃ vāsiyā taccheyyum, amusmiṃ n' atthi rāgo, amusmiṃ n' atthi paṭiḡhaṃ.*

阿羅漢はどのように、望ましいことと望ましくないことに関して同じなのか。阿羅漢は取得に関して同じであり、未取得に関して同じである。…もし、片方の腕に香りをつけ、片方の腕を斧でたたき切るとしても、*adum* に愛着はなく、*adum* に抵抗はない。

はじめの *adum* は「香りのついた腕」を先行詞とする照応に解釈することもできる。しかし、あとの *adum* については「抵抗はない」と言われている。これは「切り落とされた腕」に「抵抗はない」のではなく、「片方の腕を斧でたたき切る」ことに「抵抗はない」のだと理解される。したがって、*adum* は下線部を指す談話直示用法として捉えることができる²¹。

(10) はたとえ話ではない。指示詞は *adum* の他に、*idaṃ* が前方照応で使われている。*idaṃ* の先行詞は *tapassin-*「苦行者」である。*adum* は下線で示した

「苦行者がこのように4つの自制に防護されている」ことを指していると考えられる。

(10) D III 48–49 idha nigrodha tapassī cātuyāmasaṃvarasaṃvuto hoti. kathañ ca nigrodha tapassī cātuyāmasaṃvarasaṃvuto hoti. ... evaṃ kho nigrodha **ta-passī** cātuyāmasaṃvarasaṃvuto hoti. yato kho nigrodha tapassī evaṃ cātuyāmasaṃvarasaṃvuto hoti, **aduñ c’ assa** hoti tapassitāya, so abhiharati no hīnāy’ āvattati.

ニグローダよ、苦行者はどのように4つの自制に防護されているのか。…ニグローダよ、苦行者はこのように4つの自制に防護されている。ニグローダよ、苦行者がこのように4つの自制に防護されており、**adum** が **idaṃ** の苦行者たる状態に役立っているから、**taṃ** (苦行者) は〔4つの自制を〕持ち運び、劣った状態には向かわない。

5. まとめ

本論文は **adum** の照応用法を検討した。**adum** の大きな特徴は、多くがたとえ話に関わって使われることである。典型として次の2点をあげることができる。すなわち、たとえ話に関連した問答の際に、たとえ話の名詞句を先行詞とすること；この問答は問題提起や理由などを導く **taṃ kiṃ maññasi/maññatha** 「君／君たちは **taṃ** をどう考えるか」や **taṃ kissa hetu** 「**taṃ** はなぜか」などの文句を伴うことが多いことである。この他、問答とは関係なく、たとえ話の語りで使われる場合もある。

adum と他の指示詞の組み合わせも興味深い。**adum** が指示するものとは別のものを他の指示詞で示す場合、**adum** と **taṃ**、**adum** と **idaṃ** の組み合わせはあるが、**etaṃ** は使われない。このことは、稲葉 (2022) で検討した **etaṃ** と **adum** の指示範囲が同じという理解につながると考えられる。

はじめに述べたように、**adum** は三蔵の内 *Dīghanikāya*、*Majjhimanikāya*、

Samyuttanikāya、*Āṅguttaranikāya*、*Jātaka*、*Mahāniddeśa* にのみ現れる。この分布は他の指示詞 *idaṃ*、*etaṃ*、*taṃ* と対照的である。稲葉（2022）では、*adum* が単独で現場指示用法に使われることがかなり少ないことを述べた。本論文で見た照応用法の特徴と合わせれば、*adum* はパーリ語の指示詞の中で限定的に使われていると理解することができる。

・略号と参考文献

- A = Morris, Richard, E. Hardy, and A. K. Warder. 1888–1961. *The Āṅguttara-Nikāya*. 5 vols. London: Pali Text Society.
- A (Ne) = Kashyap, Bhikkhu J. 1960. *The Āṅguttara Nikāya*. 4 vols. Bihar: Pāli Publication Board.
- Cone, Margaret. 2001. *A Dictionary of Pāli*. Part I: *a-kh*. Oxford: Pali Text Society.
- CPD = Trenckner, V., et al. 1924–2011. *A Critical Pāli Dictionary*. 3 vols. Copenhagen and Bristol: Pali Text Society.
- D = Davids, T. W. Rhys and J. Estlin Carpenter. 2006–2020. *The Dīgha-Nikāya*. 3 vols. Lancaster and Bristol: Pali Text Society.
- Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Enfield, N. J. 2003. “Demonstratives in Space and Interaction: Data from Lao Speakers and Implications for Semantic Analysis.” *Language* 79(1) : 82–117.
- 平田未季 2020 『共同注意場面による日本語指示詞の研究』 東京：ひつじ書房。
- Huang, Yan. 2000. *Anaphora: A Cross-linguistic Study*. Oxford: Oxford University Press.
- 稲葉維摩 2022 「パーリ語の指示詞 *idaṃ*、*etaṃ*、*adum/amum* の現場指示用法について」 『真宗文化：真宗文化研究所年報』 31: 1–34.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. (S. C. レヴィンソン (著)、安井稔、奥田夏子 (訳), 1990, 『英語語用論』 東京：研究社.)
- . 2004. “Deixis.” In Laurence R. Horn and Gregory Ward (eds.), *The Handbook of Pragmatics*, 97–121. Oxford: Blackwell.
- Levinson, Stephen C., Sarah Cutfield, Michael J. Dunn, N. J. Enfield, and Sérgio Meira. 2018. *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.
- M = Trenckner, V. and Robert Chalmers. 1888–2016. *The Majjhima-Nikāya*. 3 vols. London and Bristol: Pali Text Society.
- Nidd I = La Vallée Poussin, L. de and E. J. Thomas. 1978. *Mahāniddeśa*. London: Pali Text Society.
- Nidd-a I = Buddhadatta, A. P. 1980. *Saddhammapajjotikā: The Commentary on the Mahāniddeśa*. London: Pali Text Society.

- Ps = Woods, J. H., D. Kosambi, and I. B. Horner. 1922–1938. *Papañcasūdanī: Majjhimanikāyaṭṭhakathā of Buddhaghosācariya*. 5 vols. London: Pali Text Society.
- S = Feer, Léon. 1888–2008. *Samyutta-Nikāya*. 5 vols. London and Oxford: Pali Text Society.
- S (Ne) = Kashyap, Bhikkhu J. 1959. *The Samyutta Nikāya*. 4 vols. Bihar: Pāli Publication Board.
- Sakamoto-Goto, Junko. 1987–1988. *ū vor dem Wulzelanlaut h im Mittelindischen. Indologica Taurinensia* 14: 353–382.
- 澤田淳 2022 「[訳者解説] ダイクシス研究の新展開」 Charles J. Fillmore (著)、澤田淳 (訳) 『ダイクシス講義 (Lectures on Deixis)』 221–297 東京：開拓社。
- Sn = Andersen, Dines and Helmer Smith. 1913. *The Sutta-Nipāta*. London: Pali Text Society.
- 山梨正明 2017 『新版 推論と照応—照応研究の新展開—』 東京：くろしお出版。

注

- 1 パーリ語の名詞や指示詞は性・数・格を区別して語形変化する。本論文では、指示詞の代表形に中性・単数・主格/対格の形式を用いる。稲葉 (2022) では *adum* の代表形を “*adum/amum*” としていたが、*amum* は対格にしか用いられない形式であるため、代表形に *adum* を用いることにした。
- 2 本論文では *adum* の派生形 (*asuka-*, *amuka-*) と副詞 (*amutra*) を扱わない。
- 3 M の 25 番目の経 *Nivāpasutta* (vol. I, pp. 151–160) は全体で *adum* が多く出現するため、検討に値する。具体的には、たとえ話の語りと登場人物による直接話法、たとえ話のあとの議論で使われている。しかし経が長く、用法もさまざまであるため、本論文では紙面の都合と目的の点から取り上げないでおく。
- 4 詳細な辞書の CPD (s.v. *amu*) は *adum* について “*that (ille) opposed to ayam*” と記す。新しい辞書の Cone (2001: s.v. *asu*2) もこれを踏襲する。*ayam* は本論文で言う指示詞 *idam* のことである。*idam* と反対の *adum* というのは、以下のような対照的な使い方のことである。しかしながら、こうした例も多くはなく、現場指示的とも言えないため、注意が必要である (稲葉 2022)。まずは単独でどのように使われるかに注目しなければならない。D I 4 *pisunāvācam pahāya pisunāya vācāya paṭivirato samaṇo gotamo, ito sutvā na amutra akkhātā imesaṃ bhedāya, amutra vā sutvā na imesaṃ akkhātā amūsaṃ bhedāya*。「沙門ゴータマは離間のことばを捨て、離間のことばをやめている。*idam* の分裂のために、*ito* (*idam* に属する場所の副詞) から聞いて、*amutra* (*adum* に属する場所の副詞) で話す人でなく、あるいは *adum* の分裂のために、*amutra* で聞いて、*idam* に話す人でない」。
- 5 現場指示用法とは、空間にある対象を指示詞で指す用法である。
- 6 稲葉 (2022) で設定した意味は Enfield (2003) の *here-space* を参考にしたものである。そのため、「発話/対話の場」を *here-space* に置き換えてもよさそうだが、パーリ語が文献言語であるという理由から、そのようにはしなかった。Enfield (2003) が研究したラオ語は現代に話者のいる生きた言語なのだが、パーリ語は過去のことばである。このことから、生きている言語の研究結果を短絡的に文献言語に当てはめない

ように注意した。しかしながら、*here-space* の考え方はラオ語以外の言語にも有効であることが指摘されているため (Levinson et al. 2018 に収録される諸論文、平田 2020、澤田 2022: 278–282 など)、こうした知見を参考にすることは有意義だと言える。

- 7 間接照応は他に *bridging cross-reference anaphora* や *associative anaphora* などとも呼ばれる。英語などの定冠詞における現象とされることがあるが、代名詞や指示詞にも見られる用法である (Huang 2000: 7, 249–253; 山梨 2017 など)。間接照応に対して、先行詞が文脈に存在する照応を直接照応 (*direct anaphora*) と言うことがある。
- 8 この *idam* はたとえ話に登場した人物の考えの中で使われているため、現場指示に理解する。
- 9 注釈は次のように、*sañjagghantim* を強意形に解釈する (Sakamoto-Goto 1987–1988: 362–363)。Ps IV 12 *sañjagghantim ti mahāhasitam hasamānam. samhasantim ti sitam kurumānam*. 「*sañjagghantim* とは、大笑いしているのを。*samhasantim* とは、ほほえんでいるのを」。
- 10 Fn. 2: B1-2 *°bhūmi*. S (Ne) vol. 3, p. 279: *pāpabhūmi*.
- 11 S IV 315 の *hīnam* を訂正した (S (Ne) vol. 3, p. 279)。
- 12 S IV 315 の *majjhimam* を訂正した (S (Ne) vol. 3, p. 279)。
- 13 S IV 315 の *hīnam* を訂正した (S (Ne) vol. 3, p. 279)。
- 14 この指示詞 *etaṃ* は談話の後続部分を指す談話直示用法である。
- 15 韻文では、次の例のように単独で使われる。Sn p. 113, v. 583d *kayira c' enam vakkhaṇo*.
- 16 *taṃ* は本論文で見てきた例からも予想されるように、主に照応用法や談話直示用法に使われる指示詞と言える。しかしながら、現場指示と言える場合もある。次の例は、王子が見た光景を御者に尋ねる場面である。王子は指示対象を *taṃ* で指している。D II 25 *addasā kho bhikkhave vipassī kumāro uyyānabhūmiṃ niyyanto mahājanakāyaṃ sannipatitaṃ nānāratānaṃ ca dussānaṃ milātaṃ kayiramānaṃ. disvā sārathim āmantesi: kin nu kho so samma sārathi mahājanakāyo sannipatīto nānāratānaṃ ca dussānaṃ milātaṃ kayiratī ti*. 「比丘たちよ、ヴィパッシン王子は遊園に出発していた時、大勢の人の集まりが落ち合っていて、さまざまに染まった布のかごが作られているのを見た。見てから、御者に話した。『友、御者よ、いったいどうして、*taṃ*-大勢の人の集まりが落ち合っていて、さまざまに染まった布のかごが作られているのか』」。
- 17 A I 250 の *loṇaṃ* を変更した (A (Ne) vol. 1, p. 231)。
- 18 A (Ne) vol. 1, p. 231 から補う。校訂本が参照した写本には否定辞 *na* がなかったため、*lonaphalena* 〈*na*〉 *loṇo* と補われている (fn. 4: “No *na* in MSS”)。
- 19 この *etaṃ* は先行する対話者の発言を指す談話直示用法である。
- 20 Levinson (1983: 85–89, 2004: 118–119) は談話直示用法を談話の部分自体を指すものとするが、Diessel (1999: 100–105) は命題 (*proposition*) を示すものとしている。本論文でとりあげた (9)、(10) の例では *adum* が先行して言われたことがらを指していると言えるのだが、これも談話直示用法と呼ぶことがある。

21 注釈が動作名詞（gandhālepana-「香りを塗りつけること」、tacchana-「たたき切ること」）を使って説明することからも、adum は下線部のことがらを指していると理解できる。Nidd-a I 245 amusmiṃ natthi rāgo ti amusmiṃ gandhālepane sineho natthi, na saṃvijjati. amusmiṃ natthi paṭighaṇ ti amusmiṃ vāsiyā tacchane paṭihananasāṅkhātaṃ paṭighaṃ kopam natthi, na saṃvijjati. 『『adum に愛着はない』とは、adum-香りを塗りつけることに愛着がない、存在しない。『adum に抵抗はない』とは、斧で adum-たたき切ること抵抗することと呼ばれる抵抗が、怒りがない、存在しない』。